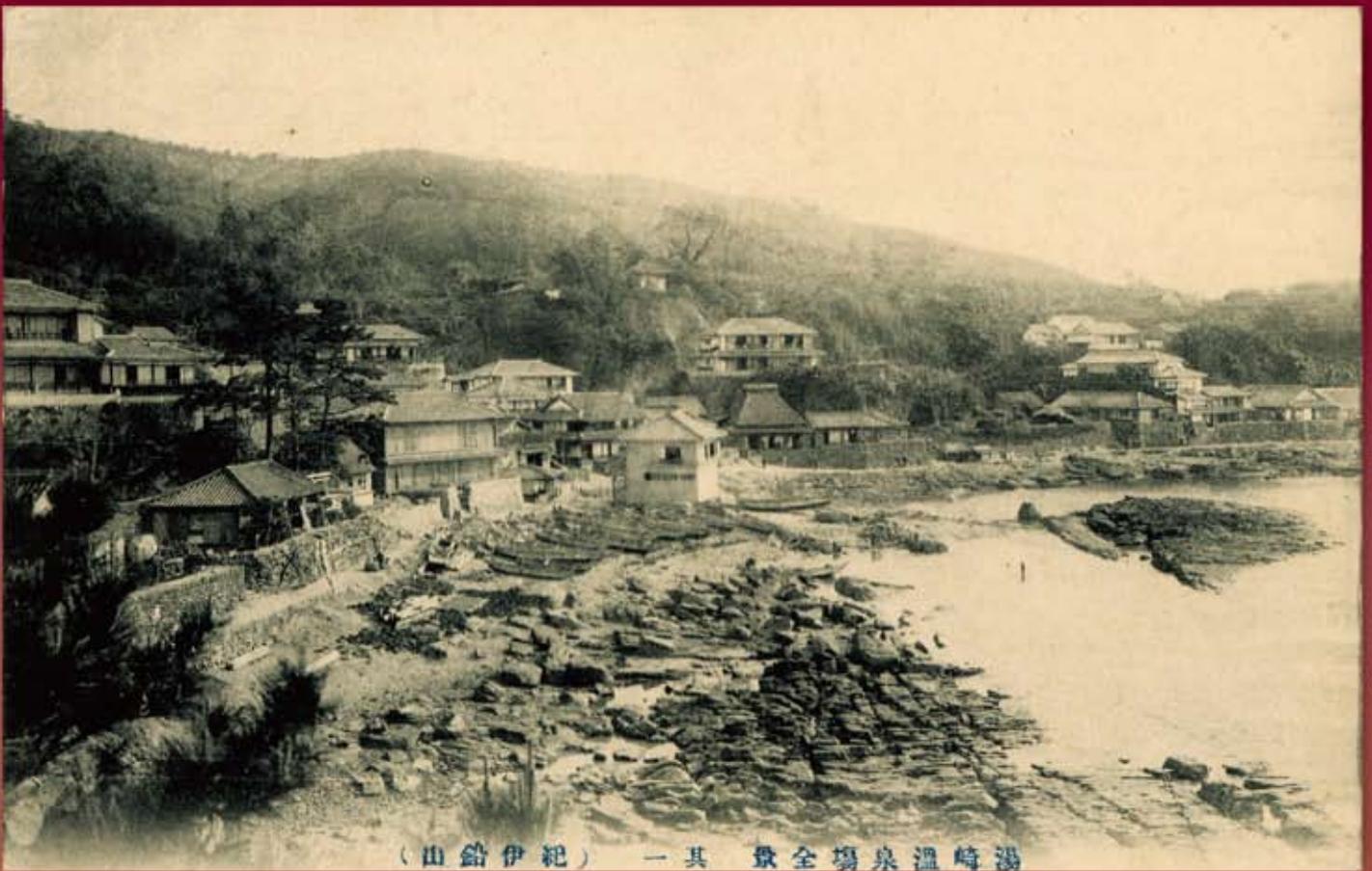


和歌山県立

もん じょ かん

文書館だまり

第27号 平成22年3月

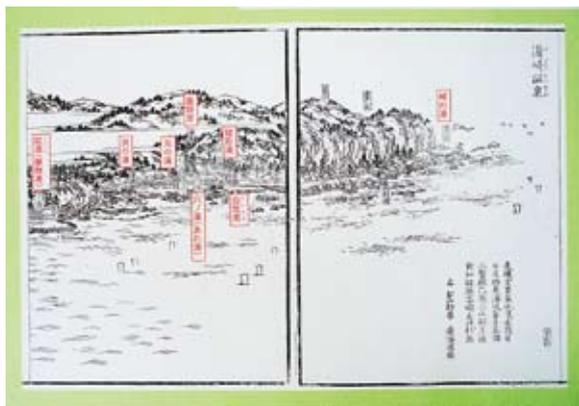


湯崎温泉の風景

風景の歴史⑪
名所図会等にもみる今昔
 —風景の移り変わり—

【湯崎温泉の風景】

白浜温泉は、道後温泉・有馬温泉とともに日本三古湯のひとつに数えられます。白浜温泉のなかでも最も古くから知られたのが湯崎温泉です。日本書紀に「牟婁温湯」「紀温湯」とあるのは湯崎温泉であるとされます。湯崎地区の江戸期の村名は鉛山村です。鉛山はもとほ瀬戸村の湯之谷という小名でした。戦国時代末期、鉛鉱が発見されてから採掘夫が多く来住しましたが、江戸初期には衰微した模様です。『紀伊統風土記』瀬戸村の項には「正保年間温泉のある所海浜数町間に家居充満するを以て別に一村とな



①疝気湯と穴ノ湯（あわ湯）の位置関係が逆になっています



②明治40年代の薬王林です



③土塀がブロック塀に替っています

し鉛山村といふ」とあって、採掘工が当地を去ってから、残った人々と新たに移住した人々で形成された集落が一六四四〜四八年にかけて、瀬戸村から分村独立

しました。同じく鉛山村の項には「凡四方温泉ある所多く山溪幽僻の地なるに此地は海浜にありて風景絶勝なれば四方の浴客日に集り歳に増して今は村中六十余戸皆浴客の旅舎となり飲食玩好歌舞の類に至るまで都会の地に差さる様になれり」とあって、旅客を呼び込みやすい立地条件と海岸の風光・温泉が相俟って栄えていった様子がうかがえます。『紀伊統風土記』は、天保一〇年（一八三九）成立ですので、江戸末期の鉛山村の旅舎では食べ物・好み・歌舞など都会の風が持ち込まれていたのでしょう。この頃は和歌山城下付近や有田、日高、淡路、阿波及び土佐方面からの湯治客が多く、これらの旅客を運んできた船を海岸に揚げ、並んでいる光景が鉛山の風物であったといえます。江戸期には①の絵図に示されている元の湯・屋形湯・浜の湯・崎の湯・摩撫湯（鉾湯）の五湯が有名でした。



④ブロック塀の切れ目から撮影しました



⑤茅葺き家屋が姿を消しています

このうち「元ノ湯崎ノ湯二ツは古の湯壺と見江自然の岩穴なり屋形浜摩舞の三ツは人作にて湯壺をなすものなり」（『紀伊続風土記』）とあります。明治期になると、五湯にあわ湯と疝気湯を加え、湯崎七湯といわれました。鉛山村と瀬戸村は明治六年に合併して瀬戸鉛山村となります。明治二〇年（一八八七）に紀州航路が開設されると大阪方面から大勢の浴客が湯崎温泉を訪れるようになります。紀伊毎日新聞によると明治三一年中の浴客数は三万二千七百二十一人で、そのうち県外客は一万四千四百三十三人でした。この頃の宿泊客は入浴料込みの宿代を旅館に支払うと何度でも温泉に入ることができました。

表紙の写真は田辺市の池田写真館が明治四〇年前後に発行したとみられる絵葉



⑥疝気湯を柳屋前付近から撮影しています



⑧花崗岩の碑が並んでいます



⑦細い道路が崎の湯まで続いています

書写真です。撮影はもう少し古いかもしれませんが、今回御紹介した湯崎地区の写真では最古のもので、写真ほぼ中央、海岸に突き出た建物は浜の湯です。その背後の茅葺き家屋は淡路屋旅館です。淡

路屋の上に位置する二階建ては菊屋です。現在も同地で大きくや旅館として営業しています。旅館関係者の方によると、もとは海岸近くに地所を構えていましたが、宝永四年（一七〇七）一〇月、東海・東南海・南海地震が同時に発生したとされる宝永地震の津波で被害を受けたため、現在地の高所に移りました。さらにその上に堂宇が見えているのは薬師堂で、周辺の林は薬王林といえます。②は明治末期頃の薬王林です。『西国三十三所名所図会』に描かれている薬師堂はこの位置からは見えません。石段をあがったところ、土塀の切れ目が境内の入り口です。③の現況は周辺が住宅地となり、水田は埋め立てられ、駐車場になっています。幕末期から存続していた薬王堂は、昭和二五年のジェーン台風で倒壊し、翌年再建され今日に至ります。④の場所は



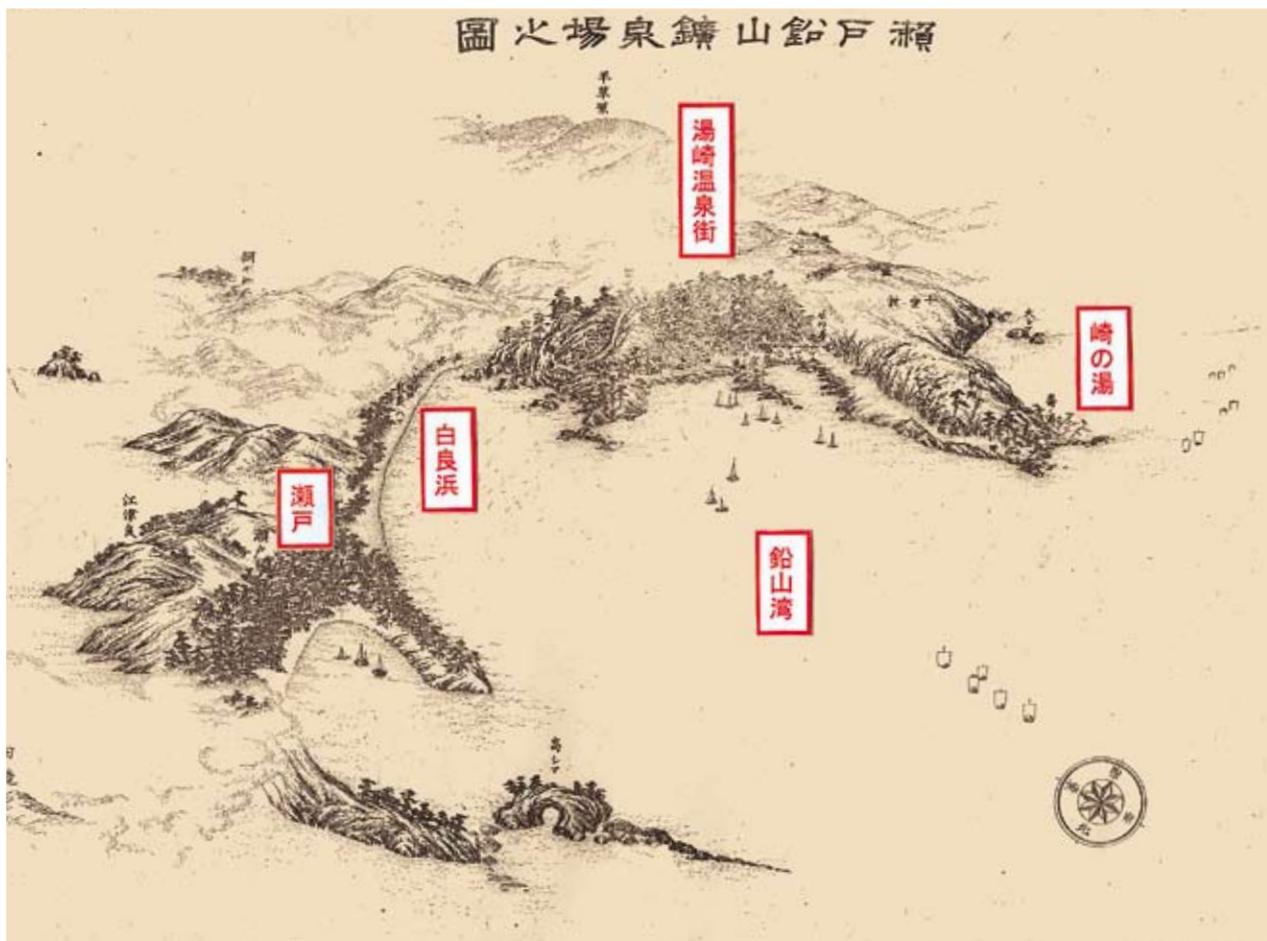
⑨薬王林には樹勢が衰えたクスノ木がみえます

路屋の上に位置する二階建ては菊屋です。現在も同地で大きくや旅館として営業しています。旅館関係者の方によると、もとは海岸近くに地所を構えていましたが、宝永四年（一七〇七）一〇月、東海・東南海・南海地震が同時に発生したとされる宝永地震の津波で被害を受けたため、現在地の高所に移りました。さらにその上に堂宇が見えているのは薬師堂で、周辺の林は薬王林といえます。②は明治末期頃の薬王林です。『西国三十三所名所図会』に描かれている薬師堂はこの位置からは見えません。石段をあがったところ、土塀の切れ目が境内の入り口です。③の現況は周辺が住宅地となり、水田は埋め立てられ、駐車場になっています。幕末期から存続していた薬王堂は、昭和二五年のジェーン台風で倒壊し、翌年再建され今日に至ります。④の場所は

湯崎館の西側通路を上ったところで、その途中に屋形湯がありました。表紙の写真に戻ると、淡路屋から少し右手の海岸部に簡素な屋根がみえるのは元の湯或いは疝気湯とみられます。さらに右手には柳屋（現在も営業）、栖原屋と続きます。海岸線に立ち並ぶ家屋を守るには波除けの石垣だけですので、風波の影響を強く受けたであろうと想像されます。明治三二年七月一日付け紀伊毎日新聞には、有田屋旅館の宿泊客が屋形湯に行こうとして海岸道を歩いていて、疝気湯とあわ湯の間で大波にさらわれた記事がみえます。なお、有田屋は当時の湯崎温泉では最大手の旅館で、写真では左端にみえる二階建てです。⑤は明治末く大正ごく初期ですが、電柱らしきものが見あたりません。淡路屋が改築され、元の湯・疝気湯とみられる場所には湯屋ができています。⑥は明治末く大正中期にかけてのもので、疝気湯の湯屋の脇を人々が歩いていました。その横に置かれている樽は温泉を輸送するためのものです。鉱泉の出荷は江戸期から泉州堺の風呂屋に向けて行われていて、この当時は神戸方面に出荷されていました。鉱泉は屋形湯の余り湯とあわ湯から汲み取っていました。疝気湯の横に樽を置いているのは、前面の岩場が船積み都合が良かったためです。『白浜町史』には「長いあゆみ板を架けて大勢の人が桶に汲みとり、背負って運び込み、船倉のタンクが一杯になると甲板に鉱泉を樽詰めにして積み込む」「船は神戸市兵庫区南逆瀬川町の新川に着き、船倉のタンク

文書館だより

クの鉱泉は四斗樽に汲みとって荷車で各風呂屋に運ばれた。大正八年(一九一九)か九年ごろの鉱泉取引値段は、四斗樽一丁で約七十銭。」とあります。⑦は大正中期頃の疝気湯です。屋形の湯の下、道のそばにあったあわ湯はこの建物にかくれて見えないようです。写真ほぼ中央、石段を上ったところが柳屋旅館の敷地で、その先が栖原屋旅館です。写真では見えませんが、崎の湯はさらにその奥です。疝気湯の隣が元の湯になっています。⑧はこの二湯の跡地を示す石碑で、湯崎館とホテルマークーズの間、きくや旅館への通路にあります。⑨は概ね大正中期頃と思われるが、改築後と思われる屋形湯の湯屋(矢印)がみえます。江戸期以来、湯崎温泉には内湯を備えた旅館はなく、浴客は外湯をめぐるのんびりとした湯治場でしたが、やがてこのような状況を一変させる出来事が起こります。大正八年に白良浜一帯ではじまった観光資本による白浜温泉の開発です。⑩は『和歌山県鉱泉一覽』(明治一年和歌山県衛生係出版)所収の挿絵に地点名を書き加えたものです。瀬戸鉛山村のうち、温泉場を中心に描いた銅版画です。この当時、集落を形成しているのは瀬戸地区と温泉がある湯崎地区だけです。⑪は白良浜から南向きに撮影したもので、大正末頃の光景と思われませんが、現在とちがって海岸の背後まで砂丘が続いています。このように山林や田畑のみで、人かない白良浜一帯八万坪を買収し、観光地開発に乗り出したのが白良浜土地建物株式会社(大正八年設立)でした。同社



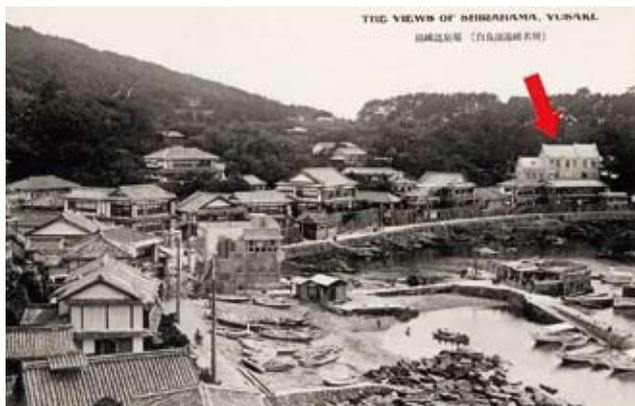
⑩鉛山湾一帯の風景です。「高シマ」は円月島です



⑫内湯旅館であることを強調しています



⑪浜に注ぎ込んでいるのは寺谷川です



⑬昭和6・7年頃の湯崎温泉

はまず温泉の掘削を手がけ、大正十一年九月二四日には白浜館を開業します。『白浜町史』によると「この白浜館は木造瓦葺二階建て、平屋とりまぜ二七〇坪ばかりで、緑のタイル張りの浴槽には、海中温泉の銀沙湯から引いた温泉がとうとうとあふれていた。これが新白浜温泉の實質上の誕生」でした。⑫は開業間もない頃の白浜館です。標柱には「白良浜土地建物株式会社経営地」とあります。同社は大正十一年七月二一日紀勢自動車㈱と合併して白浜温泉自動車㈱と名称変更します。この写真は開業から一年足らずの間に撮影したものと思われ、キャプションに「内湯旅館」とあり、この界限では初の内湯を備えた旅館でした。前後しますが、⑪に見える建物（矢印）は、公衆浴場「不老湯」と貸し切り

家族湯「岩間湯」でいずれも白良浜土地建物㈱が建設し、白浜館開業直前にオープンさせました。こうなると老舗の湯崎温泉の各旅館も黙って見過ごすわけにはいきません。大正十三年には湯崎最大手の有田屋が敷地内で温泉の掘削に成功しました。他の旅館もきそつて温泉を掘り、昭和二年頃には、有田屋、淡路屋、川口屋、栖原屋、酒井屋が独自の泉源を持つようになりました。一方、泉源を持たない旅館は他館からの供給を受けたり、昭和二年八月一五日に開業した稲荷湯（⑬の矢印）からの配湯で内湯を備えて行きました。こうして湯崎七湯に代表される自然湧出の温泉が売り物であった湯治場の歴史にひと区切りを迎えることになりました。（以上は『白浜町史』『白浜温泉史』等を参考にしました。）（溝端佳則）



⑭現在の湯崎温泉

「借家手形一札之事」をめぐる

当館に寄託されている史料群の中に紀の川市名手市場の「堀家文書」があります。その史料群の中に「借家手形一札之事（ツ―九二）」と題する封紙入の形状態の古文書があります。封紙には

手形入 古書屋

佐兵衛

と書かれていて、その内容は次のとおりです。

借家手形一札之事

一其元様借家かり受申処実正也

然上者私かり受申二付而八たどへ

何れ之人々住居為致候而も家

賃并善悪共引受其元様へ少も

難儀相懸申間敷候依之為念

引受手形差入如件

文化十五年 借り主

寅四月 佐兵衛（丸印）

源右衛門殿

これによると、堀源右衛門は文化十五年（一八一八）当時は借家経営を行っていたことが分かりますが、残念ながらその借家がどこに存在したのかが記されていません。

さて、この手形を意識すると、貴方様をお持ちの借家をお借りした以上、誰を住ませたとしても家賃や悪事などで貴方様には一切ご迷惑はお懸け致しません。

ということ誓っているように見えます。しかし、古書屋佐兵衛は、この借家に店を構えるために借りたのであって、誰かに又貸しすることは考えてはいなかったと解釈する方が自然でしょう。したがって、この手形は、他の多くの手形がそうであるように定形句を使用していると考えた方が良いでしょう。



写真 借家手形の本文及び封紙

とにかく、詳しい場所までは不明ですが、名手市場の付近に「古書屋」が存在したという風に考えて差し支えないものと思われ。これはまだ発見されていなかった事で、近世紀州の書商の分布地図を塗り変える結果をもたらすものでもあります。（須山高明）

『紀州漁業絵巻写』にみる漁撈活動

『紀州漁業絵巻写』とは

当館所蔵の県史編さん班移管資料中の資料番号一〇番に『紀州漁業絵巻写』と題された絵巻物があります。当資料は、紀州で行われていた伝統漁法を色彩豊かに描いた絵とともに、漁具、特に網等の細部を図面化し、それら漁具、漁法の解説を付した、縦二八センチ・横二二・二メートル、楮紙で作られた非常に長い絵巻物です。

当資料の原本は、上下二巻のものですが、当館には上巻の写しのみが収蔵されています。この資料の巻頭に付された「凡例」には、「本書編纂八博覧会出品奨」「」ヲ以テ実業者二就キ聞キ得タル所ヲ記（後略）」とあり、当時、現地で実業者に聞き取り調査を実施した旨が記されており、博覧会に出展する為に作成されたものであることが分かりますが、当資料には何時の、どの博覧会に出展されたのかという記述がありません。しかし、当資料に描かれた人々の服装や漁法、漁具の形態などの内容から、古くても明治初期から中期にかけての制作と考えられます。昭和七年に発行された当資料の謄写版『紀州漁業図説』には、「原本完成の年時不詳なれ共明治中年頃ならむと思惟す」とあり、恐らく明治中期に行われた内国博覧会及び水産博覧会に出展されたのではないかと考えられます。

内国博覧会と水産博覧会

『日本博覧会史』によれば、明治十年（一八七七）に政府主催の第一回内国勸業博覧会が東京上野で開催されました。内国勸業博覧会は、一國産業の奨励、一般事業の促進、學術の振興を目的とするもので、国家の富強を目指すものでした。出展品は自然物から産物、文化財に至る幅広いもので、それぞれ実業者が出展していましたが、当初、水産業を主体とする展示品は含まれていなかったようです。内国博覧会では、展示品によって展示施設を分けており、初めて水産業を主体に展示する水産館が開設されたのは、明治十三年（一八九〇）に東京上野で開催された第三回内国勸業博覧会の時からです。しかし明治三十六年（一九〇三）の大坂天王寺で開催された第五回を最後に政府主催の博覧会は地方主催に移りました。

水産博覧会は、『大日本水産会百年史』によれば、農商務省の水産課が主催で行い、旧来の優れた漁撈技術を漁業実業者が出展し、全国的に普及しようとする目的で行われました。第一回は明治一六年（一八八三）の東京上野での開催であり、明治三〇年（一八九七）に神戸で行われた第二回水産博覧会は、『農林水産省百年史』によれば、第一回の規模を大きく上回り、沖合い操業での漁網や漁船の出品が多かったことを指摘しています。ま

た同書には、明治三〇年当時、漁獲物需要の増加に伴い、それを供給するための新式の漁網を使用する必要性が強まったことも指摘しています。

当資料も全て網を使用した漁法を紹介していますので、神戸で開催された第二回水産博覧会に出展された可能性は高いと考えられますが、資料が乏しいため、その詳細は明らかではありません。

『紀州漁業絵巻写』にみる漁法

さて、当資料の内容は、一号から九号までの九種類に及ぶ漁法や網等の漁具を紹介しており、それは以下のものです。

- 第一号 ポケ網
- 第二号 堅網又は掛網
- 第三号 ハマチ網
- 第四号 縛網
- 第五号 枳網
- 第六号 中高、アングリ
- 第七号 鰹漁敷網
- 第八号 ゴツソリ網又はゾル網
- 第九号 ワラ網

これら九種類の網を使用した漁は、和歌山県内のどの地域で行われていたのかは記されていませんが、独自性を持った漁法等は、現在でも行われており、第一号のポケ網は、南紀地方で広く行われた漁火（イザリビ）漁で、現在も広く行われています。（写真1）



写真1 ポケ網



写真2 ハマチ網

第三号のハマチ網は、漁具の形態から網を引き揚げるための道具であるロクロを用いた地引網であり、中紀でよく行われていました。（写真2）

以上、二点の紹介に留まりましたが、当資料に紹介されている漁法の中には、現在では行われていないものもあり、資料に描かれた漁撈活動の様子や詳細に記された漁具の図面や解説は大変貴重なものです。（裏直記）

平成二一年度 歴史講座

今年度の歴史講座は、「小梅日記及び雑記にみられる幕末の紀州」というテーマで、きのくに志学館メディア・アート・ホール及び講義・研修室で三回の講座を実施しました。

一四四名の申し込みがあり、三回の出席者総数は延べ二七六名でした。各回とも、当館の須山高明主幹が講師を務めました。

講座の第一回では、小梅日記の嘉永六年に見える政変の処分者と南紀徳川史に見える同時期の処分者を比較検討し、第二回では「雑記」に残された処分者たちに対する戯れ歌を、第三回では嘉永七年十一月の東南地震を小梅が記録していたことを紹介しました。

- 第一回 九月二六日(土)午後一時三十分
テーマ 「治宝の死と嘉永の政変」
- 第二回 十月 三日(土)午後一時三十分
テーマ 「ちよぼくれと戯れ歌」
- 第三回 十月一七日(土)午後一時三十分
テーマ 「小梅は嘉永七年十一月の東南地震を記録していた。」



◎歴史講座のアンケートより抜粋

- ・テレビやラジオがないのに、政変を材料に民が噂や歌で情報を面白おかしく拡げた様子が興味深かったです。
- ・地震の直後に煮炊きを心配するところが主婦だなあと思いました。
- ・連日、数多くの人が講座を受けに来ているのを見て、郷土の歴史への興味の大きさを感じる。
- ・現在、我々が関心を持っている東南海地震。幕末の人々の様子が想像でき、とても興味深かったです。
- ・和歌山で生まれ育ちながら知らなかった事が多く、先人のすばらしさを知り、大変うれしく思いました。
- ・是非、小梅日記で第二回目の歴史講座を開講して下さい。(複数回答あり)

平成二一年度 田辺市古文書講座

今年度の田辺市古文書講座は、「家財道具封印一件」というテーマで、和歌山県立情報交流センタービッグ・ユードで三回の講座を開催しました。

申し込み者は二四名で、三回の出席者総数は延べ五三名でした。各回とも、当館の遊佐教寛研究員が講師を務めました。各回の講座内容は、次のとおりです。

- 第一回 十一月十四日(土)午後一時三十分
テーマ 「家財道具附け立て帳」
- 第二回 十一月十五日(日)午前十時
テーマ 「丸印三株封印」
- 第三回 十一月十五日(日)午後一時
テーマ 「難法に付き妻子養育出来難く」

◎田辺市古文書講座のアンケートより抜粋

- ・テキストの内容が金銭貸借だったので、おもしろかった。
- ・実物を持つてきてほしい。
- ・初めて江戸時代の大庄屋文書にふれることができて、おもしろかった。
- ・異体字、旧字を勉強しようという目標ができました。
- ・江戸時代の暮らしの一面がわかって、おもしろかったです。



刊行物

◎文書館紀要

自家の由緒立てをするために多くの感状・証文類を作り出した宇佐美定祐は、何を元にしてそれを作ることが出来たのかを解き明かした「宇佐美定祐は古活字版『吾妻鏡』を引き写した」(遊佐教寛)、治宝の死去に際して処分された治宝公附属家臣団の実態を初めて紹介する「史料紹介『被仰渡帳』から「舜恭院様御附属御片付」について」(松島由佳)、崎山本「和歌名所記」の成立年の比定を試み、その歴史的意義について考察を加えた「『和歌名所記』の成立とその意義をめぐって」(須山高明)の、二つの論考と一つの史料紹介を収載した紀要第一四号を発行

◎収蔵史料目録

県下でも早くからその存在を知られて、

『那賀町史料』や『那賀町史』でも一部が既に翻刻掲載されている、紀

の川市名手市場の堀家に伝わった市場村御蔵庄屋・庄屋、警察業務

を行った胡乱者改、流木取締方、紀ノ川の渡し船を運営した官頭座、名手八幡神社の宮座、堀家の家政に関するものなど、寛永年間(一六二四〜四三)から昭和二〇年代までの文書を分類・整理した目録で、中には堀正寿氏が法政大学の前身である和仏法律学校で、ボアソナードから受けた講義の記録一六点が含まれるほか、錦絵や商店の引き札なども含む約三九〇〇点を収録した「紀の川市名手市場 堀家文書目録」を『収蔵史料目録九』として発行

資料保存

◎資料保存関係

- 一 二〇年・二一年度末までの寄贈資料等の燻蒸処理を実施
- 二 「物帳古張紙」の修復処理を実施
- 三 貴重な史料を傷ませず、利用者の閲覧に供するために、「紀州東照宮近代文書」を含む約二九、〇〇〇コマのマイクロ撮影を実施するとともに、複製物を作成



貴重な資料・文献の寄贈

平成二一年度中に貴重な歴史資料・文献の寄贈が四件ありました。多くの方々にご利用いただけるように、大切に保存し、整理いたします。

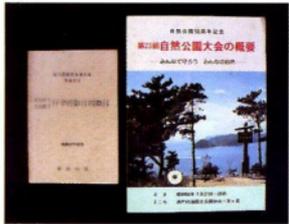
池田孝雄氏旧蔵資料

当館運営協議会委員でもある同氏が長年に亘って収集された資料群で、各種の新聞記事索引や、西牟婁郡内の小中学校の沿革史や大正七年から一四年までの南方熊楠日記、安政六年田辺領三番組御用日記留帳などがあり、今となつては手に入らない資料も含めて、総計は約一三〇〇点

仲克夫氏旧蔵資料

元県職員であった同氏が収集した資料で、第二六回国民体育大会に行幸された際の昭和天皇と皇后の日程を記録した『第二六回

国民体育大会 秋期大会 天皇陛下皇后陛下 行幸啓御日程細目』をはじめ、『自然公園五〇周年記念 第二三回



自然公園大会の概要「みんなで守ろう みんなの自然」など様々なジャンルに亘る貴重な郷土資料文献、全五二点

永栄家文書

明治一〇年代以降の県達類、欠年を含みながら明治一五年から同末年まで書き続けられ『萬覚日記帳』ほか奉公人請け状の雛形や「実語教」の写しを含む木箱二箱

古田家文書

日高郡天田組上富安村（現御坊市）で庄屋を勤め、酒造業も営んでいた古田家の蔵に保管されていた史料群で、宝永期から明治期にかけての検地帳の写しや天保一四年以降の新田畑名寄帳、年貢皆済之通等のほか、古田家の往復書簡が多く含まれた筆筒一棹とブリーキ製衣装箱二個分の史料



文書館の利用案内

■利用方法



◆閲覧室受付にある目録等で必要な資料、文書等を検索し、閲覧申請書に記入のうえ受付に提出してください。文書等利用の受付は閉館30分前までです。

◆閲覧室書棚に配架している行政資料、参考資料は自由に閲覧してください。複写を希望される場合は、複写承認申請書に記入のうえ受付に提出してください。複写サービスは有料です。

■開館時間

- ◆火曜日～金曜日 午前10時～午後6時
- ◆土・日曜日・祝日及び振替休日 午前10時～午後5時

■休館日

- ◆月曜日（祝日又は振替休日と重なるときは、その後の平日）
- ◆年末年始 12月29日～1月3日
- ◆館内整理日
- ・1月4日
- （月曜日のときは、5日）
- ・2月～12月第2木曜日

- ◆特別整理期間 10日間（年1回）

■交通のご案内

- ◆JR和歌山駅・南海電鉄和歌山市駅からバスで約20分
- ◆和歌山バス高松バス停下車徒歩約3分



ホームページアドレス <https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/>

和歌山県立文書館だより 第27号

平成22年3月26日 発行
編集・発行 和歌山県立文書館
〒641-1005
和歌山市西高松一丁目七三三
きのくに志学館内
電話 〇七三-四三六-九五四〇
FAX 〇七三-四三六-九五四一
印刷 株式会社ウイング